

新大陸で巨チン大好き
エロエロお姉さん達と

ドキドキマンきっライフ!!!

モ[🐾]ハン3人娘は
巨根が大好き

エレクトリックシーフ

丸々と太った受付嬢が空の
彼方へ飛び去って行く。
あれだけ食い過ぎだと言ったのに……

新大陸に渡って一か月が経ち、
今だモンスターを一匹も狩れていない
俺はとうとうパートナーの受付嬢までも
失ってしまった。





腹はすき疲れ果て、途方に暮れた俺は

とりあえず落ち着こうと拠点近くの草むらに隠れ

用を足すことにした。

ジヨボボボボーツ 絶望していても出るもんは出るもんだな

と妙に感心しながら、自分のイチモツを眺める。

普通の状態でも下着から出すのに軽く苦労するほどの大きさだ。

それは何も無い今の自分にとって唯一自慢できるものだった。

完全に宝の持ち腐れだけどな。

そんなどうでもいいことを考えながら、ボーツとしていると
「きやつ」とちようど俺の斜め後ろあたりで小さな悲鳴が
聞こえた。


見ると、なんと全裸の女性がしゃがんで用を足していた。



驚くよりも前にその豊満な乳房やつんとしていてピンク色に染まった
乳首、適度にくびれた腰つきやぷりつと張ったお尻が
目に飛び込んでくる。

そしてフワフワとして柔らかかそうな毛に覆われた股間からは
黄金の液体が勢いよくほとばしっていた。






「イヤッ！ 見ないで！」 当然のごとく羞恥心をあらわに頬を赤らめ
慌てる彼女だったが、一度出たものは途中で止めることはできない。
それは俺の方も同じで下手に身体の体勢を変えようものなら
あらぬところに引っ掛けてしまいかもしれないので不用意に動くことが
できないのだ。

「びい、ごめんなさい！ す、すぐに済みますからっ！」 そう言っ
て一刻も早くことを終えようとする。

尿意と違う別の欲求がイチモツに湧き上がってきた。

けれど目の前の光景に今度は



「イヤッ！ 見ないで！」 当然のごとく羞恥心をあらわに頬を赤らめ
慌てる彼女だったが、一度出たものは途中で止めることはできない。
それは俺の方も同じで下手に身体の体勢を変えようものなら
あらぬところに引っ掛けてしまいかもしれないので不用意に動くことが
できないのだ。

「びい、ごめんなさい！ す、すぐに済みますからっ！」 そう言っ
て一刻も早くことを終えようとする。

尿意と違う別の欲求がイチモツに湧き上がってきた。

けれど目の前の光景に今度は

「まあっ・・・やだ・・・なんて立派なのかしら・・・」へっ?」

嫌がられると思っていたのに予想とは違う反応に戸惑う。

それどころか頬を赤らめた彼女は興味深そうに俺の勃起しかけた

イチモツをじつと見つめてきた。

「すごい・・・大きくて太くてたくましいわ・・・私の裸を見た

せいでそうになってしまったのかしら?」

「エッ? いや、それはその・・・」

「ウフツ 初々しくて可愛い・・・

私も興奮してきちやった・・・」



そう言っつて俺の前にしやがみこむと、彼女はいきなり俺の勃起したち○ぽを啜え込んだ。

「ふぐうんんッ

ほ
ほおきいいい……」

「うっうわわっ！」まったく予想しなかった

状況に驚いて腰を引きそうになったが、

彼女がぱっくりと俺のち○ぽを啜えられている

せいで下がる事が出来ない。

「ふぐつつふぐつつ　ふ、ふごいこんなに大きいの初めて、それに

口のなかでまだ大きくなっていくわ・・・」

大きな乳房をユツサユツサとゆらし、オレの我慢汁と自分の唾液がぐちやぐちやに混ぜったよだれを垂らしながら恍惚とした表情でオレのち○ぽをしやぶる彼女。

「ご、これがフェラチオ・・・なんて

気持ちいいんだ」自分でするよりも何百倍も

気持ちがいい。さらに自分の足下にしやがんで

ち○ぽを頬張る彼女を見下ろしていると

まるで彼女を征服したような優越感と

背徳感を感じいつそう快感が増してくる。



焦り、驚き、戸惑う俺に構わず、彼女が一心不乱に口に啣えた
ち○ぽをしやぶる。ぐぼっぐぼっぐぼっ
当然童貞の俺にとって今まで感じたことのない快感にさらにち○ぽは
硬く大きくなっていく。

「うわっ？なんだこれっ」これがフェラチオと
いうものか彼女の舌が口のなかで亀頭に絡みつぎ
頬の粘膜が竿に吸いつく、彼女の唾液と自分
のがまん汁が混ざりあい得も言われぬ快感が
腰の辺りにまでじんじんと這い上がってくる。



意識と快感がち○ぽに集中し冷汗が出る、あつという間に限界を
迎えそうになる。

俺のち○ぽに夢中でひたすらにしゃぶっている。

このままだと口の中に出でしまうが、彼女の方はもう

「うう、だめだ、も、もう出る！」必死に限界を

発した俺はもうどうにでもなれと一気に

快感を放出する為、ぐいと腰を前に突き出す。

ビュグウウウーッ ドクドクドクッ

「！ムグツふんんッ ごくつごくつごくつ」これでもかど何週間も溜めた精液を彼女の口内に吐き出す。

「す、すごい 飲んでる」一瞬驚いた表情を見せた彼女だったが躊躇なく俺の精液を嚥下していく。

飲み切れずに口から溢れ出た精液が彼女の顎をつたいその大きな乳房に滴りおちる。

うっとりとした表情でオレの精液を味わいながら嚥下する彼女。「はあ・・・俺の精液をあんなに

美味しそうに・・・」



シヨワワワワ
（お、俺の精液飲みながらオシッコしてる・・・）
まだ出し切っていないなかつたのだらうか、勢いよくその股間から
黄金の液体がほとばしる。まるでフェラチオの悦びでウレションして
るかのようだ。

プルプルと股間を震わせながら、彼女は最後の一滴

まで丁寧に俺のち○ぽの精液を吸い出してくれ、

唾液と精液で濡れた俺の股間をきれいに拭き取ってくれた。

肉に魚に果物にお酒まで。テーブルに所狭しと

並べられたできたての料理の数々が俺の食欲を刺激する。

「ほ、本当にいいんですか？こんなにぐっ馳走になつて？」

「いいのよ。何日もろくに食事をとっていないんでしょ？」

「さあ遠慮せずに食べて」

「は、はい。」

「いただきます！」

こんな豪華な料理を見るのは新大陸に初めて訪れた時にひらかれた
歓迎会以来だろうか。

「う、うまい」肉汁とソースの濃厚な味が口の中いっぱい広がる。感動に目じりに涙を滲ませながら次々と他の料理も口に放り込んで行く。

「そんなに、急いで食べなくてもいいのよ、誰も取つたりしないんだから」

「は、はい。お姉さんもた、食べてください。」ご馳走になっているのは自分の方なのに何も口をつけずにいる彼女に料理をすすめる俺。



「私はさつき沢山食べさせてもらったから……」
ドキツとするような言葉を発して俺の顔をじっと見つめて
微笑むお姉さん。

「それにあんなもの見させちゃって申し訳なかったわ……
私、服を全部脱がないと用を足せない性分で……」



「あんなもの……」

一瞬出会った時の裸の彼女がよぎる。

「い、いえ……」



(おおっと) あわてて頭を振り料理に集中する。

見覚えがある顔だと思ったのだけどあの時は何せ裸だったのだからわからなかったが彼女の服と顔を改めてみて気付いた。

彼女は五期団の推薦組の編纂者だ。話でしか知らないが、

この新大陸の謎の核心にせまりものすごい活躍で調査団の発展に多大な貢献をしたらしい。つまりはかなりの有名人だということになる。





（俺、そんな人のあんな恰好を見てあんなことまでされちやつたん
だなあ、本当だったらこうして一緒の席に座るのでさえ躊躇する
程なのに・・・）考えているとまた興奮してしまいそうになるので
料理に集中する。

「それであなたこれからどうするの？ 連れ去られたパートナーさんは

捜索隊を出すとして新米ハンターが一人では色々大変でしょう？」

「そ、そうですね・・・」

料理をすべて平らげ、一息つこうとした瞬間。
「あっ！」
彼女が上着をずり上げて机の上におっぱいを丸出しにして
乗せていた。

「な、何を……」あわてて周りを見渡すが
丁度周囲からは死角になっていて見えているのは俺だけのようだった。



「うふふ、どうしたの？」

「え？いや、そのおっぱいが。」

「ねえ、あなたしばらくあたしのパートナーにならない？」

「で、でもお姉さんのパートナーは他にいるんじゃない？」

彼女が微妙に身体を揺するたびにその端正な顔立ちに似合わない大きな乳房が机の上で揺れる。皿の上の食べ残したソースなどが乳首に絡みついてテラテラと妖しい光を放っている。



A character with large breasts and a green headband. She is wearing a green top and brown pants. She has a blue cloth tied around her waist. She is looking towards the viewer with a slight smile. Her hands are clasped in front of her. The background is a dark, rocky area with some green plants.

「あたし達ここへ来てから一仕事終えちやっつて今はほとんど自由行動なの。わたしのパートナーなんてほぼ拠点に帰らずにずっと狩りをしてるわ」

「そ、そうなんですか」

「ええ、だから私今フリーなの」

「は、はあ」

（これって誘われてるんだよな・・・でもなんで新米の俺なんかと・・・）

「そう、私あなたに興味があるの」

「あなたの、アレに……」

「俺のアレ……」

「別にずっとパートナーでいようっていう訳じゃないんだから
そう気負わなくていいのよ。私の方がずっと先輩なんだし色々教えて
あげられると思うの。だから先輩にしばらくつくと思つて」

「色々と教えてもらえる……」
「気持ちでいいのよ……」

「そうちよつとだけつまむぐらいの
「ちよつとだけ……」

「あんっ」



部屋に入るなりベッドに押し倒され裸に剥かれ
上から覆いかぶさられた。

「はあっああっ大きいっ」 自らもすぐに裸になった

彼女はいきり立った俺のち○ぽをいきなり股間にあてがい
腰を下ろしていく。すでにそこはどろどろに蕩けていた。

「まだ半分も入ってないのにもう子宮まで届いちやってるわ」
「くうううう」

これが女の人のオ○ンコの中……」
彼女の中はとても窮屈で温かく中の粘膜がち○ぽ
に絡みつきキュウキュウと締めつけてきた。


（ああ、俺初めて女の人とセックス

してる……。お姉さんの中すごく気持ち

がいい） 入り口周辺はきつく締め付け

て来るが、先の方は空洞になっていて

先端がコリコリとしたものに当たっている



「ああっいいいいいい奥までいっぱい！」
そんな初体験で感動している俺のことなんてお構いなしに
お姉さんは一心不乱にち○ぽの快感に没頭している。
さっきの知的で冷静な表情は崩れ、快感に目じりは下がり
口はだらしなく開かれてあふあふしている。
その下で大きな乳房がゆっさゆっさと揺れ下腹は
出し入れするたびに引きつつている。


「ああ、もっともっと奥まで・・・」
さらに快感を貪ろうとピストンの
ピッチを速める彼女。

「うううっ！す、すごい締め付けだ」

出し入れするたびにまるで


生物のように粘膜のヒダのーっーっ

がち○ぽに纏わりついて刺激する



ぐじゅぐじゅと粘膜と粘膜が擦れあい、あとからあとから半透明の愛液が溢れだしてくる。
やはり俺のち○ぽは相当大的きいサイズなのか彼女のオ○ンコから出し入れするたびに竿に絡みついた中の粘膜を外に引きずりだしてしまっている。

オ○ンコはすでに限界まで開かれとてもきつそうでなんとかピストンを滑らかにしようと愛液を大量に分泌させている。



「ああっだめっ大すぎる！オ○ンコの中身全部引きずり
出されちゃいそう！」 一層だらしなく目じりは下がり
息を荒げ舌を突き出して快感に喘ぐお姉さん。
必死の形相だがより一層ピストンのピッチは速まっていく。
大きな乳房の乳首はとがりきり、千切れるかと思うほど
上下に激しく弾んでいる。

「くああっ！そんなに激しくされたら」
初体験の感動も味わう暇もなく
彼女の高速ピストンであっという間に
限界が近づいてくる俺。
必死で我慢しながらこのまま翻弄されて
なるものかと自らも腰を突き上げる。

「きゃはんっ?」予想外の下からの突き上げに面食らったのか
悲鳴を上げるお姉さん。

「はあんっちよ、ちよつとそれ、だめっ、ああんっあんっ!」
構わず腰をずんずんと連続で突き上げる。

「ひあっああっああっあううっ!」自分で制御できない
快感に身体全体が引きつりビクビクと痙攣するような
反応を見せるお姉さん。

「えっ嘘っ? 私、もう?」

オ○ンコ全体が一層きつくち○ぽ
を締めつける。

(も、もしかしてお姉さんイッたの
かな?) 今までと明らかに違うオ○ンコ
の反応だ。

「ああっ悔しい！こんな童貞ち○ぽに先にイカされちゃうなんて！」
(やっぱりお姉さんイったんだ・・・)

(初めてのセックスで女の人をイカせるなんてすごいな俺)

「ああっ悔しいっ悔しいっ！」 先輩としてリードするつもりが

真っ先にイってしまいプライドが傷ついたのかこれみよがしに
激しく腰を上下するお姉さん。

「わああっくううっそっ そんなに激しくしたら、もっもう
出る！」

「イってあなたも早くイきなさいッ！」

「で、でもこのままだと中に・・・」

「いいからこのまま中に出しなさいっ！」


彼女のマ○コはまたさつきと違う変化を

しガツチリとち○ぽをつかみ、子宮口

とおぼしきコリコリとした所が尿道口

にキスするようにぴったりと密着

して離さない。



「うああっ出、出るっ！」それ以上考える余裕などなく
お尻の穴のほうから亀頭の先へときゅんぎゅんとせり上がって
くる欲望をお姉さんの最奥に腰を突き上げてぶちまける。
「はあああっ出、出てるわ、中に、中に出てる！」
溜まりに溜まった精液が彼女の子宮口めがけて勢いよく
射出される。「ふあああっ！あ、熱い・・・」
彼女の粘膜が精液を一滴残らず絞る取るように動く。

ドバツと彼女の子宮に収まりきららない精液がオ○ンコの入り口から溢れだす。自分でも驚く程大量だ。
(はあっはあっ・・・お姉さんの中に出しちやった・・・)



射精の余韻に浸っているとぶるっとまたお姉さんの体が震え、オ○ンコがヒクヒクと収縮する。

「ふうっふうっ！ううつま、またイツ・・・」

（お姉さん中だしされながらまたイツてる・・・）

（初めてのセックスで生中だししてその上二回も女の人をイカせるなんて、俺って相当すごいんじゃないか。）

深く息をしながらお姉さんは射精の

快感にふけているようだ。

目は虚空を見つめ、舌を突き出したまま

口をぱくぱくさせていた。



「くぅうっ！ ま、また出る！」
何度目かの射精をお姉さんのずぐずぐになったオ○ンコに
注ぎ込む。「ふああっ！、ま、まだこんなに出るなんて
ああっもうお姉さんのお腹ぱんぱんよっ」


射精を終えるとまたすぐにピストンを
再開する。「ま、まだするの？これ以上
やったら足腰立たなくなっちやう」
室内に響く粘着音とお姉さんの喘ぎ声。
お姉さんのマ○コから溢れ出た大量の精液や
二人の混ざり合った汗と愛液でベッドが
びちよびちよになっている。

「ご、ごめんなさい。お姉さんのオ○ンコが気持ちよすぎて腰が止まらないんです」7、8回目からは数えるのをやめた射精、謝りながらも腰を止めることはせずひたすら彼女の最奥にむかって怒張を叩きつける。

「あんっああんっ、さ、流石若いわね。も、もう何度イッたかわからないわ」出し入れするたびにお姉さんのオ○コは大きく広がり粘膜が飛び出したりひっこんだりする。

とがりきつたパールピンクの陰核と陰茎が擦れ合うたびに、お姉さんが甘い嬌声をあげる。もう完全に腰砕けになっているお姉さんは、だらしなく開いた口から舌をだし息も絶え絶えで、覚えたてのセックスで獣のように女体を貪る俺の打ち込みを、観念して

ただひたすらとめどない快感に身を任せている。



仰向けになって腰を大きく曲げ丸まったエビのような
姿勢の彼女を上から見下ろす形でち○ぽをこれでもかと
どろどろになったマ○コに突き入れる。

「ああっああっふっ深い、ああっすごいわこのお○ちんちん！」
「そんなにいいですか僕のち○ぽ！」


「はあっはあっ、ええ最高よあなたのお○んぽ、初めて
見た時に一目惚れしちゃったんだから、太さも長さも形も
硬さも一級品のお○んぽだわ」

「そんなに褒められるとうれしく

なっちゃいます！」上からち○ぽを打ち込まれて

快感に喘ぐ彼女を見ていると、彼女を完全に

屈服させた感じがして征服欲が沸き上がってくる。



もっともっとお姉さんの乱れる姿が見たくて一旦入口付近まで怒張を引き抜き、彼女の足首をつかんで一層真上から見下ろす姿勢にする。

「な、何をやるの？」 不安げなお姉さんに向かって真上から怒張を最奥の子宮めがけて一気に突き入れる。「もっと感じてください！」

ズドンツツという鈍い音が聞こえお姉さんの子宮がひしやげる。

「あぎやつー！」あまりの衝撃に喉を逸らし上体を反らせ悲鳴をあげるお姉さん。白濁した愛液が派手に飛び散る。

「ごっごひゅーっひっぐっううっ！」
喉に息を詰まらせながら呼吸するのもやっとと言った
風で髪の毛を振り乱すお姉さん。
「ごっごこれ、だめえ！」
「ああっすごい、お姉さんの中どろどろでぐちやぐちやで
ぎゅうぎゅうと俺のち○ぽを締めつけて来てすごく
気持ちいいです！」

そのままぐりぐりと子宮口を亀頭で
上下左右にえぐる。

「ふんぐふうううーぐぎぎいーっ！」
白目を剥き歯を食いしばり最早快感とも
苦痛とも判別のつかない表情を浮かべる
お姉さん。



そしてずるっと一気にオ○ンコからち○ぽを引き出す。
竿に絡みついた中の粘膜と一緒に飛び出してくる。
「ひああああっ！」 内臓ごと引きずり出されそうな
衝撃と快感に目をしばたかせながら喘ぐお姉さん。

「くひやあっはあっはあつも、もう
勘弁して、オ、オ○ンコ壊れちゃうー！」
「まだまだもう一回行きますよ」懇願する
彼女の足首をつかんでまた一撃を加える
体勢をとる。

「ひっいつっだめっやっやめて本当に
オ○ンコ壊れちゃう……」



ズドンツとさつきよりも強く子宮の中にまで到達しそうな
勢いで怒張を突き刺す。

「がっ……ひゅっ！」一瞬お姉さんの息が止まったかと思
うとびくんと彼女の体が魚のように跳ね、頭を
大きくのけ反らせる。

「くううっ出る、また出る！」

突き入れると同時に湧き上がる射精感に
俺はたまらず彼女の子宮めがけて
精液を吐き出す。

ドクドクととても何回も射精したとは思えない程大量の
精液が彼女の子宮に流れこんでいく。

「はああつ、出てる子宮に精子いっぱい出てる〜」
意識が半分飛びかけながらも最奥に放出される精液が
子宮を満たす快感に白目を剥いて喘ぐお姉さん。

既に精液でいっぱいになっている子宮から
精液が溢れだし、彼女の大きくて紅潮した尻を
汚してゆく。

「はふう〜ふうっふうっふうっ・・・す、すごい
まだ出てる・・・」



「ふうーッ」流石に打ち止めだと悟った俺はそれでも尚
勃起している怒張をぐちよぐちよと最奥をならすように
掻き回す。

「ひっぐっうぐぐっ、も、もう動かしちゃだめえ」既に
限界の極みを何度も迎えているお姉さんは、それでも
押し寄せてくる快感に苦しそうにもだえる。

そして俺はさっきのち○ぽを一気に
引き抜いたときのお姉さんの反応が
もう一度見たくて、またち○ぽを
一息に、最奥から、抜き出す。

ズルンツ

「おほうツッ！」ち○ぽを引き抜くと獣のような咆哮を上げたお姉さんのあそこからブリツツと子宮が飛び出した。

がばがばに開ききったアソコから裏返った中身の粘膜が露出してヒダのつぶつぶが見える。プリツツとしてツヤツヤした子宮がふるふると震えている。

予想していなかった光景に驚きながらその鮮烈な光景に俺は見とれてしまう。

「お姉さんの中身が飛び出しちゃった・・・」



「ふんっつあつはあつあつだ、だめ、
で、出る出ちやう〜」なんとか意識を保ち顔を起こした
お姉さんは必至でこらえたのだろうか
弛緩しきったアソコからは、ぷしやああーツと失禁し、
同時に飛び出した子宮口からも噴水のように精液を噴出させた。
「へああああ〜っ、やっやだあ〜全部見られちやう〜
み、見ないでえ〜」羞恥と快感と脱力感でだらしないアへ顔を
俺に晒しながらお姉さんはしばらく尿道と子宮からみっともな
く恥ずかしい汁を出し続けていた。

夢の初体験をしたその翌日、朝から俺は編纂者のお姉さんについて新大陸調査に同行する為、物資班のリーダーの所に来ていた。編纂者のお姉さんともなるとその研究課題もかなり危険度が高くなる。

しかも調査したい編纂者は沢山いるので全ての人員をそのレベルに合わせてうまく振り分ける為にそういったことを人を含めてあらゆる物資を管理している物資班のリーダーが担っているのだ。

けれど何やら希望している調査がいつぱいらしく、編纂者のお姉さんと物資班のリーダーのお姉さんがさつきから揉めているみたいだ。

二人の会話を端で聞きながら、昨日の出来事を思い出す。
あまりに刺激的すぎて夢のようで本当にあつたことだとは
とても信じられない。(あの綺麗なお姉さんと俺が朝まで
セックスしまくってたんだよなあ。)

そう思って彼女を見ているとあの大きなおっぱいや
ぷりっとしたお尻やふわふわとした陰毛、きゆうきゆうと
締めつけてくるオ○ンコの感触が思い浮かんでくる。



(あのオ○ンコの中にたっぷり中出ししまくったんだよなあ)
つい数時間前までセックスしていたので彼女の子宮には
今も俺の精子がたっぷりつまっているはずだ。

そんなことがあったなんて素振りを一つも見せず

真面目な顔で会話している彼女を見てみると、

なんだか自分だけがお姉さんの特別な面を知っているようで

優越感を感じる。(有名人で普段はあんな堂々としていて

立派なお姉さんも俺のち○ぽを入れたらひいひいよがって

乱れまくるんだからなあ)

(女の人って普段どんなにしゃんとしているように
見えてもお○んちんで気持ちよくして上げれば
誰でもあんな風になるのかなあ。)

(ていうかあの物資班のお姉さんもかなりいいスタイルだよなあ) 今まで会うことはあってもそこまでまじまじと見たことはなかったが改めて見るとその褐色で筋肉質の体はかなり健康的で魅力的だ。

おっぱいは編纂者のお姉さんよりも一回り大きくしかもバツンと前に張り出していてよく見るとかすかに色の濃い乳輪がはみ出しているようにも見える。服に隠れてわからないがお尻のほうはパーンと張っていて揉みごたえがありそうだ。陰毛も編纂者のお姉さんより硬くて剛毛に違いない。オ○ンコももつとずっときつくて万力のようにギュウギュウ締め付けてききそうだ。

セックスを経験したせいだろうか、今まであまりしなかった見方で女性を見るようになったようだ。

(でも気が強そうで皆からも一目置かれててかなりのやり手そうだし俺なんか相手にしてくれないだろうな……)

「困ったわねえ……」

「仕方ないでしょそのエリアは今人がいっぱいいないんだから」

とそんないやらしいことを考えていると急に二人がこっちの方を向いた。「あっそうだ、じゃあこういうのは

どうかしら……」
編纂者のお姉さんが何やら物資班のお姉さんに耳打ちする。

「……ふーん、この子が？」あまり興味が無いといった風に俺の顔を見る物資班のお姉さん。

「そうそう今私の臨時パートナーをしてくれている子なのよ……で相談なんだけど……」（なんだ、なんだ？ 一体何の相談なんだ？）

数時間後、俺は編纂者のお姉さんのプライベートルームで物資班のお姉さんのオ○ンコにち○ぽを突っ込んでいた。


「おほーっすごい！まだ半分も入ってないのに奥まで届いちちゃってる！」

「くううっ！な、なんて締めつけなんだ！」

キュートなルックスにエキゾチックに光る褐色の肌、バーンと張った編纂者のお姉さんより一回り大きいおっぱいに大きめの乳首、腹筋は逞しく割れていてその下の逆立った剛毛が卑猥さをさらに引き立てている。


その下の獣肉の突起は子供の親指よりも大きくまるで動物の角のように尖ってそそり立っている。

色素が濃いめの分厚いビラビラが竿に密着し中の粘膜が編纂者のお姉さんのよりも強くギュウギュウと締めつけ中に引き入れるように動いてくる。



「君新米ハンターのくせに、ち○ぽだけはもうマスター級だねっ！」褒められているのかけなされているのかよくわからないお姉さんの言葉をしり目にまるでオ○ンコだけ別の生き物のように蠢いてぐいぐいとち○ぽを中に引きずり込んでくる感触に俺は射精感を抑えるのに必死だった。「おおおっくうっ！」（同じオ○ンコでも編纂者のお姉さんとまた全然違う感触だ・・・）


あっちはぐにゅぐにゅとち○ぽ全体を柔らかく包み込んでやさしく愛撫してくるのに対してこっちのオ○ンコは入口付近のものすごい締めつけで中の方にぐいぐいと飲み込んでくるような感触だ。子宮付近はよりコリっとしていて編纂者のお姉さんよりもずっと狭い。



「フフツ、その必死でこらえてる顔がたまんない。でもすぐいっちゃったらダメだよ、特別に調査させてあげる分しつかり楽しませてもらわないとね！」


「そうだ何故こんなことになったのかと言うと編纂者のお姉さんが満員の調査の枠を特別にまわしてもらおう代わりに俺の巨チンでのセックスを交換条件として提示したのだ。そんなことでうまく行く訳がないと当の俺自身が思ったのだけど、

その場でパンツを脱がされ俺のち○ぽを見た物資班のお姉さんの目の色が急に変わり、ことごとくいう次第に至ったのだった。(俺のち○ぽってそんなに魅力的なのか?)



「ホラホラ腰が引けちゃってるよ！もつとちやんと動いてよ！」
「は、はい！」 射精感を必死でこらえながらピストンを
開始する。そうだちやんと彼女を満足させないと交渉が
決裂してしまうのだ。既にお姉さんのオ○ンコはぐちよぐちよ
になっっているが、ものすごい弾力で中ほどまで入った
ち○ぽをもつと奥までいれようとするも押しもどされてしまう。
そうしていてもオ○ンコの粘膜はどんどん勝手にうごめき
中に引き入れようとち○ぽをしごいてくるのでこれが
やばいぐらい気持ち良くて油断するとすぐに出してしまい
そうになる。

「あんっいいいよ、ふふっどうあたしのオ○ンコ中々でしょ？
覚えたての新米ハンターくんには上級すぎたかな、
でっかくて太くて硬くていいち○ぽだけどあたしを
満足させるにはちよつと役不足かなあ〜」



「そ、それは困ります！」突いてダメならと、子宮に
亀頭を擦り付けながらぐりぐりと回転させる。このテクニク
は昨日、編纂者のお姉さんに使って何度もイかせた技だ。
「あううっいいいっそれいいよっ覚えてたてのテクって感じて
すごい初々しくてかわいいわっ」喘ぎながらも余裕の表情を
見せるお姉さん。
（くそー所詮覚えてたてのテクではお姉さんをひいひい言わせる
のは無理なのかー）
「あんっあんっ！このまま全部絞りだしてあげる！」

グニグニグニユウウツとさらに激しい動きで
ち○ぽを締めつけてくるお姉さんのオ○ンコ。

「くううっ、や、やばいこのままだと全部絞りだされてしまう
！」未熟なテクニクなんて使っててる場合じゃなかった。
こうなったら力任せに突っ込むしかないと渾身の力で
ち○ぽを彼女の子宮目掛けて突き入れる。

「えいッ！」ブチッと一瞬何か弾けるような音がなり、お姉さんのお腹がボコンツと膨らむ、渾身の力をこめて突き入れたち○ぽがお姉さんのオ○ンコの中身を限界を超えて引き伸ばし遅しい腹筋が伸び切ってち○ぽの形に歪む。「おほッ？ ひゅっ……」

目を見開いて表情を歪めたお姉さんの動きが一瞬止まる。





「んがあっ！」とお姉さんの体が大きく跳ね、その巨乳を
はずませて頭をのけ反らせる。ピクピクとオ○ンコが
引きつりブシュツと愛液をしぶかせる。
(うわっ！すごい反応)

ひくひくと身体全体を蛙のように痙攣させている。
(いったのかな?)


「うああっ！も、もっどー！」もう彼女の体全部がオ○ンコになつたような気がして、俺はさらなる快感を求めて彼女の内臓を掻き回すように激しくピストンを開始する。「ひっあっがっ！ほっほおおっしゅっしゅっい、こっこれすごいよおお！」信じられないといった表情で目を見開き口を開いて舌を突き出しながら喘ぐお姉さん。

「お○んぽで内臓掻き回されちゃってるう！
こ、こんな初めてえり！」未知の快感に俺のほうも
もうホントに限界だ。
「くううっ、も、もう、出、出る！」



「うおおおおっ！」咆哮を上げながらお姉さんの奥の奥でち○ぽを爆発させる。

「おっふー！」嗚咽と共にお姉さんのお腹の先端がまるで精子を流し込んだコンドームのようにプクツと膨らむ。



グルンとお姉さんの目が裏返り、オ○ンコからはブシヤシヤ
ツと愛液をほとばしらせる。
「うおおうつー!」どくどくどくつとさらに睾丸から供給された
精液がお姉さんの許容量を超えた子宮に濁流のように
押し寄せる。

「ひゅう、ひゅう、ひゅう、ひゅう……」

「ぎやはっ！」 忌の悲鳴をあげ、再び大きく身体をのけ反らせ
たお姉さんは全身をビクビクと痙攣させ、そのオ○ンコからは
大量の精液が逆流する。



「ひいーいひやつ、はっふはあああつ！」頭を振り乱し
アクメ顔を晒しながら嬌声をあげるお姉さん。
ビクンビクンツと断続的に身体を震わせて何度も絶頂に
達しているのだらう。

「ひゅっひゅごいー！いっぱい出てるうー お、お○んぼ
最高〜」

自分でも驚くほどの量を出しながら俺は
ビクビクと蠢くお姉さんのオ○ンコにゆっくり
出し入れしながらその快感を味い続けた。





「じゃあ次はこっちね」さんざんオ○ンコに中出しセックスをした後、お姉さんが四つん這いになってお尻をこっちに突き出した。

「エツっ?こっちって?」大きくて引き締まったお尻はとても揉みごたえがありそうでその中心にはかわいい窄まりが呼吸に合わせて収縮している。

「君ってまだお尻のほうではしたことはないんだよね?」

「お尻ってアナルセックスのことですか?」

「そうそう」


「まだしたことないです・・・」

「じゃあアナル童貞は私がもらっちゃうってことで！」
アナルセックスというものがあるのは知っていたがまさか
昨日の今日でアナルまで経験するとは思っていなかった、
それにこんな小さな穴に俺の巨チンが入るとはとても
思えない。

「ホラ、早く早く！お姉さん我慢
できないの〜」


（ほんとに入るのかなあ・・・）

さつきあんなに出したにも関わらず
ギンギンに勃起したままのち○ぽを
お姉さんの窄まりにあてがう。



心配をよそにいきり立ったチ○ポを押し込むとお姉さんの
アナルが信じられないぐらい広がり、ズブズブと俺の
ち○ぽを飲み込んで行く。「ぐおおっ！すっすっごい締めつけ！」
オ○ンコとは比べ物にならないほどの締め付けだ。
「んんっほおおッおおグッ！」
ふるふると小刻みに震えながら目をしばたかせて
咆哮を上げるお姉さん。

「お、お尻、ひっ広がるうう〜
く、苦しいッ！」お姉さんの苦悶の
表情に躊躇した俺は腰を引いて
しまう。「くっ！」ぬぶぬぶぬぶと
肛門の粘膜を引きずり出しながら
ち○ぽが抜けていく。



ズルツとち○ぽが抜けると、小さな窄まりだったアナルが
ぱっくりと開き中の粘膜が丸見えになった。


「くはっ！、ちよつとどうしたの途中で抜かないでよ！」
「ご、ごめんなさい。お姉さんが苦しそうだったでつい……」

「もう、遠慮しないでズボツと
やっちやっついていいから」「は、はい」
ぽっかりと開いた肛門でおねだり
するようにお尻をふりふりする
お姉さん。俺は再度狙いを定め
ち○ぽを突き入れる。

ズブズブズブツさつきよりは少しスムーズにアナルの中に
極太のち○ぽが入っていく。

「くはあああつ〜！ああつち、ち○ぽ入ってくるう〜
ああつきつきついお尻裂けちゃううう〜」お姉さんが
ぎちぎちのアナルにち○ぽを飲み込みながら目と口を
目いっぱい開いて伺い知れない快感に喘ぐ。

「くううううっ！や、やっぱり
すごい締め付けだ！」まるで万力で
締め上げられているようなアナルの
感触に歯を食いしばって耐える。
そうしてお姉さんのアナルは
ほとんど俺のち○ぽを飲み込んで
しまった。



「す、すごいホントに入っちゃった。」限界まで伸び切ったお姉さんのアナルがヒクヒクとち○ぽを啜えながら収縮している。「くはあっはあ、はあ、ああっ苦しいで、でもこのお尻の穴が伸びきってる感じがいい!」


ぎゅっちりとはまったち○ぽはこれ以上動かしようがないくらいがっちり拘束されている。「じやつ、動かしてみていきなり激しくやつちやっついていいからね」

「は、はい。じやあ行きますよ」万力の締めつけに耐えながら
がしっとお姉さんの腕をつかみ、力を込めて突けるように
体勢をロックする。

「はあ、はあ、はあ。ああ〜早く早くう〜」

そして

呼吸を整えお姉さんの尻たぶに
腰を叩きつけるように、ぐいっと
ち○ぽを突き入れる。



ズブズブズブツと直腸の奥深くち○ぽまでち○ぽが飲み込まれていく。「くあああああつああつふつ深いいいいいっ！」
白目をむき舌を突き出して嬌声をあげるお姉さん。
ぶるぶると挿入の苦痛と快感に筋肉質のお尻が震える。

最奥の方は入口のように締めつけて
こず直腸の粘膜がち○ぽに絡みつき
マ○コとは違う快感が沸き上がる。
そのギャップがとても気持ちいい。
「お姉さんのアナルの中温かくて
ヌルヌルしてて気持ちいい！」




そして長いストロークで直腸の最奥の壁にたたきつけたチ○ポを一気に引き抜いて行く。

「ぐっほおおおおおっ！ほおおっ！」ヌブヌブヌブブーッと直腸の粘膜がち○ぽに絡みつき抜くと同時に肛門が裏返って中身が引きずりだされ、ありえないくらい肛門の入口が引っ張られる。「あああっ！出すときたまんないいいっ！」内臓を引きずり出される感触に獣の咆哮を上げて喘ぐお姉さん。

ズドンツと間髪いれずに入口付近まで引き抜いたチ○ポをまた直腸の最奥まで突き入れる。

「ひあああっ！」愛液と直腸の粘液が混ざってぐちゅぐちゅと派手な音を立てる。「うおおお！」引き抜くたびにブリッと伸びるお姉さんの肛門が卑猥でオレは高速ロングピストンで怒張を何度も出し入れする




ぐぽんっと怒張を再び引き抜くと、完全に伸び切った
肛門がぐぱあつと口を開けぬらぬらになった直腸粘膜が
外から丸見えになる。

「ぐほおおっ！」びくびくツと抜いた瞬間にお姉さんのお尻が痙攣する。

はあはあとお姉さんが肩で息をするたびに開ききった肛門がぱくぱくと収縮する。


「ああ、お姉さんのお尻がこんなに広がってなんて卑猥でエッチなんだ」ドロツと直腸粘膜からネトネトの汁がにじみ出る。



「はあはあ、お尻がスーサーするよお。」


「お、お姉さん。俺・・・」

「いいよまだ出してないんでしょ。あたしのお尻壊しちゃって
もいいからもっとズボズボして！」



「ああっお姉さん！」彼女が言い終わるより先に俺は
一息にち○ぽをアナルに突き入れる。
「ぐはああああっ！」覚えたてのアナルセックスの快感に
出し入れするたびに病みつきになっていきそうだ。
苦悶の表情を浮かべるお姉さんに構わずただただ
怒張を突き動かす。

「ああっあがつ、す、すごい！
激しいいいいいいい
アナルいいよおっツ！」



あっという間に限界を迎え彼女のアナルの最奥にち○ぽを叩きつけたかと同時にたまったマグマを一気に吐き出す。「ぐおおおおっ！で、出るッ！」熱いマグマが直腸の粘膜を突き破る勢いで放出される。

「ひあああっ！あっ熱い！」煮えたぎったマグマが逆流してブシヤツとアナルの外に勢いよく飛び出す。「ひゃあああっああっ！」バチツと火花が散って白目を剥き唾液を飛び散らせながら口をぱくぱくさせるお姉さん。そしてアナルで絶頂しながら、ギチギチと俺のち○ぽを締めあげるお姉さんの肛門。それを引きずりだすように一気に怒張を引き抜く。

ズルンツッ！

すると

「んぎゃうっ！」とお姉さんが忌の

悲鳴を上げ、ブバツと赤い直腸が

外に飛び出した。



「ほおおおっおおっ！」お姉さんはアクメ顔を晒しながら失禁すると同時にビュルルツと直腸から勢いよく特濃のミルクをほとばしらせた。「ああ、お姉さんの中身が丸見えに・・・」

ぷるるんとした直腸の粘膜がテラテラと怪しく光り卑猥で凄惨な雰囲気醸しだしている。

お姉さんの飛び出した直腸はしばらく盛大にミルクをまき散らし続け、そのままベッドにつつぷしたお姉さんは白目を剥きながら気を失った。

それから数日後、俺はお姉さん達と三期団の拠点に来ていた。

というのも新大陸のエリアはいくつかの拠点がそれぞれ管理しているのものでその期団の管轄するエリアの調査を行うにはそのリーダーの許可を得ないといけないからだ。

そして例のごとく今回も交渉は難航しているようで、三期団の期団長のお姉さんと3人で何やら相談しているようだ。



交渉の間、何もできることがない俺はここ数日のことを
思い出してニヤニヤする。

ホントここ数日間には運が向いてきているというか

編纂者のお姉さんと偶然出会ってセックスし、

さらにその次の日には物資班のお姉さんとアナルセックス
までしてしまいこれでもかと性の快感を味わった。

昨日なんて二人を相手にアソコとアナルでセックスして
何度も中出ししまくったくらいだ。

ハンターとしても二人のお姉さんが手取り足取り面倒を見て
くれて俺にあった任務を任せてもらい着実に経験を
積んでいる。まだ大型モンスターは一体も狩れていないけど。

(やっぱりこれって俺のち○ぽのおかげなのかなあ)

女の人ってどんな人でもオ○ンチンを入れて気持ち良く
してあげたらもう離れられなくなってしまうのだろうか。)

(それにしてもこの三期団の団長のお姉さん相当いい身体して
そうだなあ)

このお姉さんは確か竜人で俺や他のお姉さん達とは違う
人種だったはずだ。眼鏡をかけ面長でスツと通った鼻筋と
切れ長の美しい瞳と尖った耳が不思議な魅力を醸し出している
ダボつとした服を着ているのでわからないが、おそらく胸は
かなり大きくて二人のお姉さんを凌駕する程の爆乳だろう。
腰もきゅつとしまつてそうでお尻は大きく肌はきめ細やかで
色素が薄く透き通るような美しさがある。
体毛は薄そうなのでアソコの毛は控えめな感じだろう。

(ああ〜見れば見るほど魅力的な人だなあ、この人の
オ○ンコはどんな感触がするのかなあ) 知的で無表情だし
冷たい印象を受けるけど、この人も俺のち○ぽを突っ込んで
あげたら他の二人みたいにアヘアへとよがりまくるの
かなあ)



と、とても人には言えないようないやらしいことを考えていると、3人が急にこっちを見た。

（えっなんだろうこの状況？・・・なんだかとてもデジヤヴな感じがするぞ・・・）

「で、相談なんだけど・・・」と編集者のお姉さん。

「あゝそれはいい考えかもね」と物資班のお姉さん。

3期団のお姉さんが俺のことを見定めるように見つめ

「ふむ・・・とっても・・・ふっう・・・」

「見た目はね」「そうそうでも脱ぐとすごいものよ」

「ちよつとあなたここでパンツ脱いでみて」と編集者の

お姉さんが言う。「エツ？ここでですか？」

「あんたのアレがちよっと入用なのよ」

アレとはアレのことだろう。「で、でも恥ずかしいし・・・」

「何を言ってるのよ、さつきからこつちの方見ながら

ニヤニヤしてエッチなこと考えていたくせに」

(バ、バレてる・・・)

「てかもうテント張っちゃってるじゃん、さつさと脱ぎな」

「うわっ！いつのまに！」股間をみるとそこはすでに

盛り上がっていた。

「わ、わかりました・・・」観念して俺がパンツをずり下ろすと半ば勃起していたマストがぶるんと天井を向いてそそり立った。



「ムツ！」っと俺のイチモツを見た3期団のお姉さんの
目の色が変わる。

「あはっ、もうあんなになってる！」

「どう？あれでもまだ完全に勃起してないのよ」

「あんな・・・大きいの・・・はじめて見た・・・」

と3期団のお姉さんはぼそぼそと呟くと、何を思ったか
その場で服を脱ぎ始めた。



あつという間に全裸になった3期団のお姉さんの
体は想像以上で、雪のように白く透き通った肌
にばるんばるんと大きく張った爆乳、腰は折れてしま
いそうなほど細くくびれ大きなお尻がより一層際立
ち、下の毛はとでも薄く股間の割れ目が立って
いても前から丸見えになっている。
「うわっ大胆！」
「彼のち○ぽを早速試そうっていうのね。いいわ満足
したら交渉成立ってことでお願いよ」

「理想の……ち○ぽ……希少種……」
そう言うところ期団のお姉さんはすぐ近くの台座に
ごろんと仰向けに寝転がった。



全裸で仰向けに寝転んだお姉さんがカモン、カモンと手招きをして俺を自分のそばに来させる。呼吸するたびに仰向けになっても形を保っている爆乳が揺れる。

俺のいきり立ったイチモツが彼女の顔の上に来ると、すんすんと鼻をならしての匂いを嗅ぐ。

「大きさ・太さ・形・色・それに匂いまで……」

最高……」頬を赤らめ、うっとりとした表情をしてお姉さんが口をあめぐり開けて舌を突き出す。

「はあ……色っぽい……」突き出て先が少し二股に分かれた舌がうねうねと蛇のように動く。

「もっと、近くに……来て……」

「は、はい」言われるがままに、ちろちろと舌を出して誘う彼女の口にいきり立ったモノを添える。

お姉さんの生暖かい息が亀頭の先に当たる。

「はああ、れろん．．んまあ．．」ぴとっとお姉さんの顔にち○ぽを引っ付けるとそのチロチロと動く舌が陰茎の裏にそって這いなぞる。

「うおおっ」ゾクゾクっとお尻の穴から腰にかけて快感が電流のように流れる。

細く白い指で愛おしそうに俺のち○ぽをさする。彼女の唾液が竿を濡らしたらだらだらと幹をつたう。

「なんて、エッチな舐め方なんだ．．」

「ああ．．いい味だわ．．今まで味わったことのない．．」
そう言うと彼女は細指でゆっくりと亀頭の先を自分の口へと持って行く。

「さあ、思いっきり味合わせて．．」

とても入りそうにないが、生き物のように蠢く舌とうっとりとして妖艶な彼女の顔にほだされた俺はずぶずぶと彼女の口に野太いち○ぽをねじ込ませていく。

「あああ、すごい！」どこまでも飲み込まれて行きそうで、大きく開かれた彼女の口にズブズブズブとち○ぽを突き入れていく。ボコンツボコンツと途中、何回かの引っ掛かりを超えて俺の野太いち○ぽが彼女の喉の奥深くまで侵入して行く。

「ぐうっふうううっ」お姉さんがごふごふと苦しそうな声と苦悶の表情を浮かべ、彼女の口内は俺のち○ぽを押し戻そうとし、全身にはどっと汗がにじむ。しかし彼女自身は抵抗の素振りは全く見せず俺のち○ぽを飲み込んで行く。

「すごい……」「うわあ、あんなのが口に入るんだ……」

両脇で見っていた二人のお姉さんは驚愕と好奇心の表情を浮かべ息を荒くし頬を赤らめて目の前の光景に見入っている。

「おっ、おうふう・・・」
これがイラマチオというものか、温かくねっとりとした口内、コリつとした喉ちんこを超えて細く狭い食堂の先までち○ぽを通してしまった。おそらく亀頭の先は胃まで達しているだろう。少し先っちょよがヒリヒリする。お姉さんの体を串刺しにして、怪しい征服欲と加虐心が刺激される。

そしてピクピクと痙攣しながら串刺しになったお姉さんが、指でピストンを催促する。

（本当にいいんだろうか・・・）躊躇しながらも、初めてのイラマチオに興奮した俺は思いっきり彼女ののど

マ○コでち○ぽをしごきたくはずっぽりとはまったち○ぽの挿入を開始する。

グボツグボツグボツと力任せにち○ぽを出し入れする。
「ふっ、ぐむむっむっおっ！」と盛大にむせながら苦悶と
恍惚の表情をうかべ、のどマ○コでち○ぽを味わうお姉さん。
口からぶちやぶちやと唾液が飛び散りち○ぽにも絡みつく。
「うおおっ生暖かくて喉ちんこがカリに引っかかって
気持ちいい！」

グボボッと突き入れ、ずるると引き抜く内臓を犯す
快感が病みつきになりそうだ。出し入れするたび苦しそうに
むせかえるお姉さんの反応もたまらない。
何度目かの挿挿のあと、たまらずお姉さんが台座をタップする
それを台図に俺はズルンツとち○ぽを引き抜く。



「ぐぶはあああ〜ッ！」ブチヨツと濃い唾液を吐き出しながら大きく息を吸うお姉さん。ち○ぽは彼女の唾液とその他の分泌物でぐちやぐちやになっっている。

「くはあっはあ．．．はあ．．．はあ．．．」口から大量によだれを垂らしながらイラマチオの余韻に浸るお姉さん。飛沫が眼鏡まで飛び散り、真っ白だった肌は赤く染まっている。口から唾液が亀頭に向かって糸を引いている。

それを長い舌で舐めとってベロンと美味しそうに飲み込む。

「ああ、すごいわ。見てるこっちまで感じてきちゃう．．．」

「そう言えば私まだイラマやってなかつたっけ、あとでやっってもらっちゃおうかな。」両脇のお姉さん二人も興奮して息を荒げている。

「いい．．．ち○ぽ．．．最高．．．もっ」とうっとりとした表情で口をあめぐりさせながらお姉さんが再度ち○ぽを催促する。

「ふぬうっ！」
ズブズブと勢いよくお姉さんの喉マ○コを突き刺していく俺。
さつきよりも喉の奥深くち○ぽが飲み込まれて行く。
「ふぐんぬうううう！」 目を見開き苦悶の表情を浮かべて
極太ち○ぽを受け入れるお姉さん。どつと身体から汗が大量に
吹き出す。あつという間に根本まで飲み込んでしまった。
そしてすぐに抽挿を開始しようとする俺に両脇で見っていた
二人が言う。

「もっと激しくやっちゃっていいんじゃない？」

「そうね、窒息させるぐらい強烈なほうが彼女喜ぶんじゃないかしら」

「エツ？ 激しくって・・・」

「首絞めよ首絞め、そのほうが喉がしまっていていいのよ」

「こ、こうかな！」二人に誘われるように両手でお姉さんの首をがっちりつかむ。すると明らかに彼女が面喰らった反応を見せ、焦りの表情を見せる。喉を貫かれながらもまだ余裕があったお姉さんの焦りにさらなる加虐心を刺激された俺は渾身の力でピストンを開始する。

「んごおおおっ……！」と何かもごもごとお姉さんが言ったが、俺は構うことなくち○ぽを思いっきり叩きつける。

「うおおおっ！」バツンバツンっと彼女の喉マ○コ目掛けて腰を打ち付ける。

「ぶぎいいいいっぶごっごっごっごぼぶっ！」豚の鳴き声のような汚い悲鳴を上げて、白目を剥いたお姉さんの体が大きく跳ねる。必死に抵抗しようとのたうち回るが、がっちりと喉をロックされているのでち○ぽが抜けることはない。「ああっいいいっ気持ちいい！お姉さんの喉マ○コ」気持ちいい！」

窒息寸前でもがき苦しむ彼女に容赦なくち○ぽを叩きつける。

彼女の苦しむ反応がなんとも快感で、ギリギリと喉を

一層強く締めあげる。口から大量の唾液をまき散らし、

痙攣しながら暴れるお姉さん。彼女の喉マ○コが気持ち良すぎ

てあつと言う間に射精感が濁流のように押し寄せてくる。





「で、出るー！うおおおっ！」 最奥にち○ぽを突き入れると同時に精液を爆発させる。ドクドクドクツと彼女の胃に直接精液が流れ込む。

「ごっつぶつぶぎっごぼううううっ！」 行き場を失った酸素とともに大量の精液が逆流する。

彼女の眉間で火花が散り忌の悲鳴もかき消されるように精液が飛び散る。お姉さんの体がビクンッと大きく跳ね、アーチ状になったところで静止する。

「ふううううっまだ出る！」 両手で彼女ののどをち○ぽでしごくように動かしながら最後の一滴まで精液を出し切る。頂点で静止したお姉さんの体が小刻みに震えている。

「ふうふうっ！」 精液を出しきりズルンとち○ぽを引き抜く。彼女の唾液と胃液でち○ぽはぐちゃぐちゃだ。

どんつと彼女の体が台座に着地してびくびくと痙攣する。

「ばっ・・・あががががふっ・・・」

知的だった彼女の面影はなくならしくアクメ顔をさらす。

顔中には精液が泡になって溢れ、鼻の穴から白い鼻水が

垂れて提灯を作っている。

チヨロロツと股間からは失禁し、どうやらイラマチオで

絶頂に達したようだ。

「ひくすご・・・」 「派手にやったわねえ」 煽っていた

お姉さん達もひどい光景に引いている。けれどそう言いつつも息を荒げて顔を紅潮させている。

俺と言えばお姉さんのひどいアクメ顔になんだか一層興奮してち○ぽをヒクヒクとひきつかせていた。

失神したお姉さんを抱えて彼女のプライベートルームになだれ込んだ俺はそのまま2回戦目に入りました。

彼女を仰向けに寝かせ長くしなやかな足をあげ、怒張をズブズブと挿入していく。

「おおお、これがお姉さんの中！」

竜人のお姉さんのアソコはなんだか

中が複雑な形をしていてち○ぽを

根本から先までぐにぐにと締めつけて

来た。(やつぱ女性によってこの具合が

全然違うんだなあ)

失神したお姉さんに構わずがんがん腰をふっついていると大きすぎる爆乳をばるんばるんと揺らしながらお姉さんが目を覚ました。

「ハッ……う……こは……あっあん……おっ大きい……」

勝手にち○ぽをマ○コに入れられているのにお姉さんはすぐに切羽詰まった声で喘ぎだす。

本来なら3期団のリーダーに勝手にこんなことをしたら怒られるどころでは済まないはずだ。

けれど彼女はこの事態をすんなり受け入れ巨根の快感に身をゆだねている。

「はあっはあんっ・・・いい！ち○ぽ・・・気持ちいい！」

（やっぱり女の人ってお○んちんで気持ちよくしてあげると他のことはどうでもよくなってしまふのかな）

俺のち○ぽがお姉さんの複雑なオ○ンコをえぐるたびに髪を振り乱し切れ長の目の目じりは下がり、舌を突き出して矯正をあげる。さつきまでの無口が嘘のようだ。

「ああっお、奥まで来てる！小袋突き破られるッ！」

あああっお、おかしくなるう〜！」

彼女の複雑なマ○コにあつたという間に限界を迎えた俺は、何の躊躇もなくその最奥で精液をぶちまける。

「うおおっで、出る！」

「ひあああーっ！ああっお、奥で

精液でてるー！っい・イクウーッ！」

ビクビクと身体を震わせ射精と

同時に絶頂に達するお姉さん。

白目を剥き口を開きっぱなしにして

獣の咆哮を上げる。

（竜人の女の人がオ○ンコでイクの

を見るのは初めてだな。でも皆

俺のち○ぽでアクメすると

だらしくよがって同じ顔を


するんだよなあ）

続けて2度出したぐらいではまったく収まらない俺のち○ぽでさらに突こうとすると、二人のお姉さんが部屋に入ってきた。「ほお〜早速やってるねえ〜」「私たちも混ぜてもらおうかしら」



3人同時は流石にきついかなと思っただけど、3つのオ○ンコを見比べながらするのもいいなと考えた俺は三人をこちらにお尻を向けて縦に並べさせた。「もうなんて格好させるのよ」「とんだスケベだねえ君。」「はやく。」「つつこんで」

3人ともぶつぶつ言いながらも
すんなり言う通りにしてくれた。
もうこのお姉さん達は
俺とのエッチなことになると何でも言うことを聞いてくれそう
だ。



「うわあ、すごい眺めだなあ」三つの熟したお尻が3段に重なっている。一番上の竜人お姉さんが一番お尻が大きくて色素が薄目のビラビラにクリトリスは角のように長く尖っている。中の粘膜はとても複雑な形をしている。

その下の物資班のお姉さんのアソコは色素が濃いめの太くて縮れたビラビラに太くてブリツとしたクリトリス、アソコの粘膜はギュウギュウに締め付けてくる。一番下のお姉さんのアソコはキュウキュウと包み込むように締まり色は二人の中間ぐらいだ。



「もう眺めてないで早く入れてよお〜」「は、やく〜」
「オ○ンコ待ちきれないわあ〜」大きなお尻をふって
もうすでに濡れ濡れになったマ○コからお汁を垂らしながら
俺におねだりしてくる。

これが本当にあの新大陸で多大な成果をあげた人たちとは
とても思えない。ただの淫乱なオ○ンコのことしか
考えていないメスだ。

「もう、しょうがないなあ。皆本当にエツチなんだから」
「お、お前のち○ぽのせいだからな。」「そうよ、そのでっかい
オ○ンチンが私をこんなにしたのよ」

「は、はやく突っ込んで！」

「どのオ○ンコにいれようかなつと！」俺はそう言いながら
まだ味わい足りてなかった竜人お姉さんのオ○ンコに
いきり立った怒張を突き入れる。ズブズブズブと一気に
最奥までめり込んでいくち○ぽ。

「ああんっ！ああっおっおおきいっ！」「あっずるい！」
「あゝあの内臓ごと犯される感じがたまらないのよねえ、
はあゝ考えただけでイッてしまっそうだわ」



そうして俺は夜が明けるまで3人のオ○ンコに何回も
ち○ぽを出し入れしてたっぷりと中出ししまくった。



3人とも最後のほうは失神して
いたけどぐちよぐちよになって開きっぱなしの
オ○ンコだけはいつまでもヒクヒクと物欲しそうに蠢いていた。

それから数週間後、俺とお姉さん達は古代樹の森を探索中に偶然見つけた天然の入り江にいた。

今では環境のよかったここを少し改装して秘密のやりもくプライベートビーチとして使っている。

ここなら誰にも気兼ねすることなく好きな時に好きなだけセックスしまくることができる。

そしてなんとついさつきここに偶然迷い込んできたドスジャグラスを俺は見事討伐することができたのだ!



「ついにやったわね！大型モンスターの討伐おめでとう！」
「やるじゃん！ちよつとは見直したわ！」
「おめでとう……」

「ありがとうございます！これも皆さんのおかげです！」
「まあ、これぐらいできないと、あたし達としても立つ瀬がないからね！」

「そうね、なんせその道のエキスパートが3人もサポートしてあげてるんだから」「当然の結果……」

またブツブツと色々言われているが何はともあれこれでようやく俺もハンターの仲間入りができる。

「そうだ！俺の初大型モンスター討伐を記念して皆で写真を撮りましょう！」そう言う俺は調査用のカメラを取り出す。「せっかくなのでお姉さん達も一緒に並んでください！」「ああ、裸でお願いします。」



「しようがないわね・・・」「なんでわざわざ裸なのよ・・・」
「スケベ・・・」文句を言いながらも言うとおりにしてくれる
お姉さん達。

今ではだいたいのお願いなら喜んで聞いてくれる
ようになった。

今や毎日見ている光景だが、やはり豊満なエロボディが
3つ同時に並ぶと壮観だ。



昨日も朝から晩まで3人と中だしセックスをしまくったので
3人の子宮には俺の精子がたっぷり詰まっているはずだ。

「ドスジヤグラスの膨らんだお腹みたいにお腹みたく、お姉さん達のお腹も俺の精液で膨らんでますよ。並んで撮影するのに
お似合いですね。」

「センスないわね」「下品・・・」「余計なこと言っていないで
さっさと撮りなさいよ!」

「じゃ、じゃあ皆さんドスジヤグラスのお腹の上に
座ってください」「いい、行きますよーハイッ!・・・」



「パシヤッ！」



それから大分月日は流れ・・・今もお姉さん達との関係は
変わらず続いていた。

今日もお姉さん達とエッチする為にここへ集まった訳だが・・・

「皆さん具合のほうはどうですか？」

「ええ、そうねもう少ししたら生まれそうかも」

「もう、服で隠すのもきつくなってきたかなあ」

「臨月・・・」

そう言うのと三人は手慣れた素振りて服を脱ぎ・・・



全裸になると、見事なポテ腹が3つ現れる。

「本当にドスジヤグラス級のお腹になっちゃいましたね。」

「そりゃあんだだけ毎日ズビズバ出せばね」

「当然の結果だわ」「あ・動いた・」当然全員俺の

子どもだろう。3人共に大きかったおっぱいはさらに大きくなって乳輪も色が濃くなりポテつと膨れている。

陰毛も見事に生い茂り、脇の毛も伸び放題だがこれは僕が処理しないように頼んでそうしてもらっている。

「問題はいつバレるかよねえ・」「ええ、いつまでも隠し通せるものでもないわ」「確実に・バレる・」



「お、俺ががんばって一流のハンターになって皆さんを幸せに
して見せますから！だから……」

「ふふ、期待しているわ」「しっかりやるんだぞ」
「がんばって……」

こうして俺の新たなハンターライフが始まった。
古代樹から吹き込む濃密な生命の息吹を含んだ風が
お姉さん達の下の翳りを優しく揺らしていた。





































































































































































